

「第14回自動車安全シンポジウム」の開催報告

Summary Report on the 14th Automobile Safety Symposium

上野 昌範*1
Masanori UENO

1. はじめに

2013年12月1日、東京都江東区の東京ビッグサイトにおいて「第14回自動車安全シンポジウム(国土交通省主催)」が開催された。今年は「いのちを守るクルマの今～知っておきたい安全技術とその使い方～」をテーマとし、一般ユーザーを対象として安全技術の紹介とパネルディスカッションが行われた。安全技術の紹介では、「最近の予防安全技術の紹介」、「チャイルドシートの安全」が報告され、パネルディスカッションでは、有識者を招いて、安全技術を活用した高齢者、子供の安全対策等についてのパネルディスカッションが行われた。

このシンポジウムは国土交通省の委託事業「自動車安全対策のマネジメントサイクルの推進に係る調査」の中の一つとして開催されたものである。



受付の様子

2. シンポジウムの概要

2.1 主催者あいさつ

最初に、国土交通省 自動車局 次長の清谷伸吾氏から、今年度のシンポジウムでは、「いのちを守るクルマの今～知っておきたい安全技術とその使い方～」として、安全装置の正しい理解と、適切な利用に向けて議論したいとのあいさつがあった。



国土交通省 自動車局 次長 清谷伸吾氏

2.2 安全技術の紹介

パネルディスカッションに先立ち、最近話題となっている安全技術の紹介が行われた。

①「最近の予防安全技術の紹介」

一般社団法人日本自動車工業会
安全・環境技術委員会 安全部会長
高橋信彦氏

(要旨)

交通事故死者数の経年変化には2つのピークがあり、前者はインフラ整備、交通安全教育、交通取締りの充実により死者数を削減してきた。後者は、自動車の安全性を高めることで死者数の削減

*1 一般財団法人日本自動車研究所 安全研究部

を進めているが、2010年くらいから削減幅が小さくなっている。今後さらに削減していくには、認知支援、判断支援、操作支援といった予防安全技術が重要になってくる。

最近注目されている予防安全技術の一つに被害軽減ブレーキがある。これは、カメラ、レーザレーダー、ミリ波レーダーなどを利用して、前方の障害物を検知し注意喚起、一次ブレーキ（軽いブレーキ）、二次ブレーキ（緊急ブレーキ）を作動させるシステムである。

もう一つは、車両周辺視界情報提供装置である。代表的なシステムは、車両周辺を4つのカメラで撮影した画像を処理し、あたかも車両真上にカメラがあるような映像を運転者に伝えることで、駐車時などに車両周辺の障害物の発見を支援するものである。

近年、レーダーやカメラ等のセンシング技術の車両適用により、新たな装置の普及が急速に進んでいるが、装置ごとにそれぞれの特徴があるので、その動作原理、機能を十分理解して使用することが大切である。



一般社団法人日本自動車工業会 安全・環境技術委員会
安全部会長 高橋信彦氏

②「チャイルドシートの安全」

一般社団法人日本自動車部品工業会
レストレイント部会 PR-WG主査
濱野幸造氏

(要旨)

交通事故の衝撃の大きさは、たとえば速度50km/hで正面衝突した場合は自重の約30倍とな

る。すなわち、5kgの赤ちゃんが約150kgになり、抱っこでは支えきれない。そのため、チャイルドシートの使用が重要になる。

チャイルドシートは、新生児から1歳頃までの乳児用シート、1歳から4歳頃までの幼児用シート、3歳から11歳頃までの学童用シートの大きく3つに区分されている。

チャイルドシートを車両に取り付ける際は、車両との適合確認、子供の体格との適合確認をし、乳児用シートは後ろ向きに、幼児用シートと学童用シートは前向きに取り付けるようになっている。チャイルドシートの取り付けは、年々容易になってきており、シートベルトによる固定の場合でも、普及当初のロックンググリップ仕様から、本体内蔵ロックオフデバイス仕様となっている。さらには、シートベルトを使用しないISOFixチャイルドシートが登場し、コネクタを車両の受け側に差し込む方式となっている。

チャイルドシートの使用期間は、道路交通法では6歳未満とされているが、実際には、車両側のシートベルトの使用が可能になる身長135cmから140cmくらいまでは、学童用シートの使用により座高不足を補う必要がある。



一般社団法人日本自動車部品工業会
レストレイント部会 PR-WG主査 濱野幸造氏

2.3 パネルディスカッション

安全技術の紹介に引き続き、下記のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。

司会：
 室山 哲也氏 日本放送協会 解説委員室
 解説委員

パネリスト：
 鎌田 実氏 東京大学
 大学院新領域創成科学研究科
 人間環境学専攻 教授

清水 和夫氏 国際自動車ジャーナリスト
 森山 みずほ氏 自動車ジャーナリスト
 高橋 信彦氏 一般社団法人日本自動車工業会 安全・環境技術委員会 安全部会長

濱野 幸造氏 一般社団法人日本自動車部品工業会
 レストレイント部会 PR-WG 主査

柴田 年輝氏 一般社団法人日本自動車連盟
 交通環境部 事業推進課長 副参事

久保田 秀暢氏 国土交通省 自動車局 技術政策課
 技術企画室長



パネルディスカッションの様子

初めに司会者の室山氏から、少子高齢化が進む中で、高齢者や子供といったいわゆる交通弱者の安全を守るための議論を通して、全体の交通安全について考えていきたいとの話があり、ディスカッションが開始された。

交通事故の実態としては、全体の死者数が減少する中で、高齢者の死者数は変わらないため、相対的に割合が増えている。また、高齢者が第一当事者となる事故は、平成元年から平成22年までの間で約4.6倍に増えている。一方、子供の死因では不慮の事故が最も多く、この内の約2/3が交通事故によるものといわれている。そのため、高齢者と子供への安全対策が急務といえる。

高齢者は、加齢とともに身体が衰えてくる一方で、精神的には若い頃の意識のままに行動することで危険なケースに陥ることがある。このような特性を理解して対策を検討する必要がある。

歩行者事故は、薄暮時に横断歩道以外の場所で発生することが多く、その時の服装が比較的暗い色で目立たないといった特徴がある。その上で、高齢者は、横断中に信号が十分に確認できずに横断しきれない場合がある。このような場合に、周囲から信号や車両の状況を知らせることも安全確保には効果がある。

高齢運転者の安全確保に向けては、車両の安全対策などのハード面だけでなく、その正しい使い方を含むソフト面の対策、あるいは、新しい技術だけでなく、従来の技術でも正しく使われていない技術の見直しなど色々な面から対策することが大切である。その上で、これから出てくるであろう、最新の予防安全技術なども、その技術について正しい情報を発信していくことで、誤解を排除していくことも大切である。

子供の安全については、チャイルドシートの使用が重要であり、その使い方についても十分に理解しておく必要がある。

最後に、交通安全の向上には、ユーザーとメーカー、歩行者と運転者あるいは市民と国といった様々な立場で、交通安全に関する情報をいかに共有していくかが大切であるとのまとめで終了した。

3. おわりに

今回の自動車安全シンポジウムは、一般ユーザーの参加を促すため、モーターショー期間に合わせて初めての休日開催とした。また、シンポジウムの内容も、従来の講演とパネルディスカッションの二部構成から、より一般向けの内容としたパネルディスカッションを中心とした構成にした。

その結果、参加者については、従来数名程度であった一般ユーザーの参加が全体の1/3程度に増加した。パネルディスカッションの内容についても、アンケート結果などを見ると、一般ユーザーからは有意義な情報が得られたなど好評であった。